

生まれは西か東か

—平城京出土の備前産須恵器の胎土分析—

はじめに 平城京には各地から豊富な物資が運び込まれる。須恵器はそれ自体の調納だけでなく、漆などの容器といった多彩な経緯によってもたらされたことが明らかになっている。それゆえ律令国家における物資流通の実態を捉えるための格好の資料であり、前提として生産地の検討が不可欠である。現在6グループ(群別)に分類されているが、未だ範疇に入らない個体も多く、研究の深化が必要とされる。

1998年の研究集会「古代律令国家の須恵器調納制を考える」にて、生産地の研究者と、意見を交換し資料を検討する機会をもち、多くの示唆を得た。中でも備前産と美濃産の須恵器の、製作技法や焼成の類似が指摘された。多角的な検討が必要となってきた。

岡山理科大学の亀田修一・白石純両氏より、寒風窯産須恵器の研究の一環として平城京出土資料を対象に胎土分析の希望があり、備前産・美濃産に比定される資料を提供した。その結果、両生産地の識別が可能であるとの見解を頂いた。本稿では資料と分析結果を紹介し、須恵器の産地を考える上での参考に供したい。

分析資料の観察 分析資料は15点である。その内の杯蓋(1・3・6~15)の特徴と産地比定について述べる。

二条大路SD5100出土資料：1は明灰色の色調である。胎土中に黒色粒子を含む。つまみは中央が低くなる形態を呈する。外面は頂部を回転ケズリ、他の部分は回転ナデを施す。特徴から備前産と判断した。

長屋王邸SD4750出土資料：3は青灰色。外面に斑点状に灰がかぶる。つまみは中央が低い形態。頂部回転ケズリ、

内面回転ナデ。内面に墨が付着し、硯として使用している。また漆もわずかに付着。備前。

平城宮馬寮東方地区SK5283出土資料：6は灰白色。黒色砂粒を含む。一部に釉がかかる。つまみは半球状。頂部を回転ケズリ、他は回転ナデで内面中央部を不定方向にナデ。備前。7は灰色。黒色粒子がロクロの回転方向に沿ってはしる。つまみはわずかに中央が高くなる形態。頂部を回転ケズリ、他の部分は回転ナデ。備前。8は明灰色。黒色粒子を含む。つまみは中央が高い形態。頂部を回転ケズリ、他を回転ナデし、後に内面中央部を不定ナデ。備前。9は灰色。外面に灰がかかる。つまみはそろばん玉状。頂部を回転ケズリ、他の部分は回転ナデ。備前か。10は灰白色。外面に灰が付着。つまみは欠失。頂部を回転ケズリ、他の部分は回転ナデ。備前。11は明灰色。つまみは中央が高い。外面頂部からかえり近くまで回転ケズリ。他の部分は回転ナデの後、内面中央に一定方向のナデ。内面に重ね焼きの痕跡。美濃。12は灰色。黒色粒子がロクロの回転方向に沿ってはしる。つまみは中央が低くなる形態。外面は回転ケズリ後に回転ナデ。内面は回転ナデ後、中央部に不定方向のナデ。13は灰白色。黒色砂粒を含む。つまみは中央が高い。外面頂部は回転ケズリ、他は回転ナデ。美濃。14は灰白色。つまみは上面が平坦になる。かえりの上を一周回転ケズリ。他は回転ナデ。備前。15は灰白色。黒色粒子を含む。外面に釉が付着する。つまみは欠損している。外面は頂部からかえりの近くまで回転ケズリ。他の部分は回転ナデ。焼けひずみ大きい。備前。

なお1・3については『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告』(1995)、6~15については『年報1999-III』を参照頂きたい。

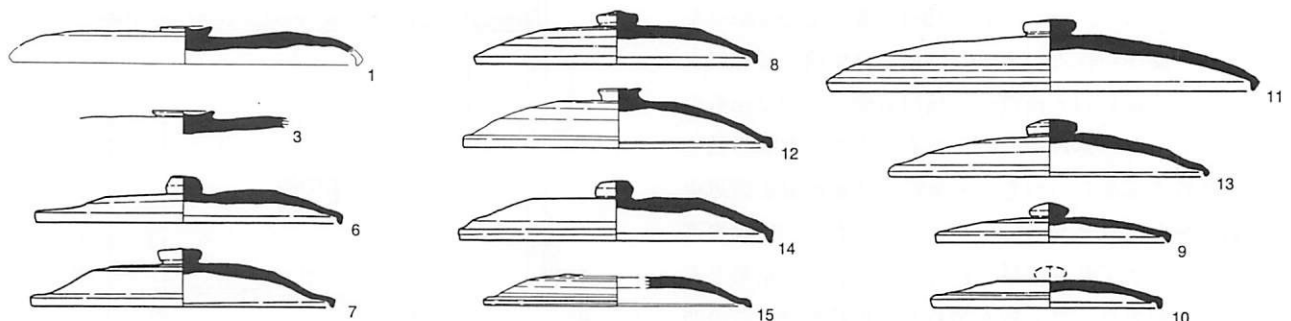


図1 分析資料実測図 (S=1:4)

表 生産地試料分析結果(上)と今回の分析結果(下)

窯跡群	点数	Si	Ti	Al	Fe	Mn	Mg	Ca	Na	K	P	Rb	Sr	Zr	
寒風窯跡群	40	平均値(%) 標準偏差	73.16 ±1.37	0.62 ±0.08	17.01 ±0.96	3.03 ±0.41	0.03 ±0.01	1.71 ±0.07	0.47 ±0.15	1.9 ±0.18	1.89 ±0.16	0.08 ±0.03	62 ±5.31	84 ±28.29	246 ±31.93
老洞窯跡群	40	平均値(%) 標準偏差	71.19 ±1.73	1.01 ±0.09	18.66 ±1.06	3.17 ±0.90	0.02 ±0.01	1.82 ±0.06	0.13 ±0.01	1.92 ±0.17	1.88 ±0.15	0.1 ±0.02	52 ±5.70	51 ±7.36	291 ±17.05
尾崎大平1号窯跡	33	平均値(%) 標準偏差	72.1 ±0.96	0.97 ±0.07	18.22 ±0.77	2.83 ±0.29	0.02 ±0.00	1.79 ±0.07	0.17 ±0.03	1.83 ±0.17	1.88 ±0.14	0.1 ±0.02	54 ±5.48	59 ±7.55	297 ±15.63

試料番号	器種	Si	Ti	Al	Fe	Mn	Mg	Ca	Na	K	P	Rb	Sr	Zr
1	杯蓋	68.36	0.94	19.43	4.25	0.03	1.8	0.49	2.19	2.32	0.1	74	97	224
2	杯蓋	66.38	0.59	18.74	5.33	0.12	1.8	3.2	1.75	1.73	0.26	57	26	267
3	杯蓋	65.38	0.89	22.41	4.97	0.04	1.95	0.38	2.16	1.65	0.08	68	82	212
4	長頸壺	72.72	0.71	18.02	2.84	0.02	1.75	0.38	2.03	1.28	0.17	61	71	297
5	甕	74.38	0.8	16.22	2.84	0.02	1.61	0.42	1.81	1.68	0.14	44	72	227
6	杯蓋	69.13	0.54	19.66	3.02	0.02	1.84	0.39	2.48	2.74	0.07	74	80	286
7	杯蓋	70.41	0.62	19.14	3.03	0.02	1.69	0.37	1.9	2.67	0.06	70	77	333
8	杯蓋	73.82	0.58	16.27	2.88	0.03	1.58	0.42	2.04	2.17	0.12	60	54	288
9	杯蓋	82.45	0.9	18.23	2.58	0.04	1.82	0.17	1.65	1.99	0.1	60	53	261
10	杯蓋	72.24	0.89	18.37	2.66	0.04	1.79	0.19	1.66	1.99	0.08	60	54	293
11	杯蓋	71.84	0.84	19.15	2.02	0.01	1.82	0.15	2.04	1.94	0.1	60	50	271
12	杯蓋	71.94	0.57	18.16	3.75	0.02	1.68	0.22	1.67	1.81	0.09	57	44	275
13	杯蓋	73.12	0.85	18.34	2.24	0.02	1.72	0.25	1.54	1.78	0.05	53	62	293
14	杯蓋	69.69	0.55	19.46	3.21	0.03	1.81	0.46	1.98	2.6	0.14	69	75	258
15	杯蓋	73.23	0.59	16.92	3.14	0.03	1.69	0.3	1.95	1.96	0.11	63	55	290

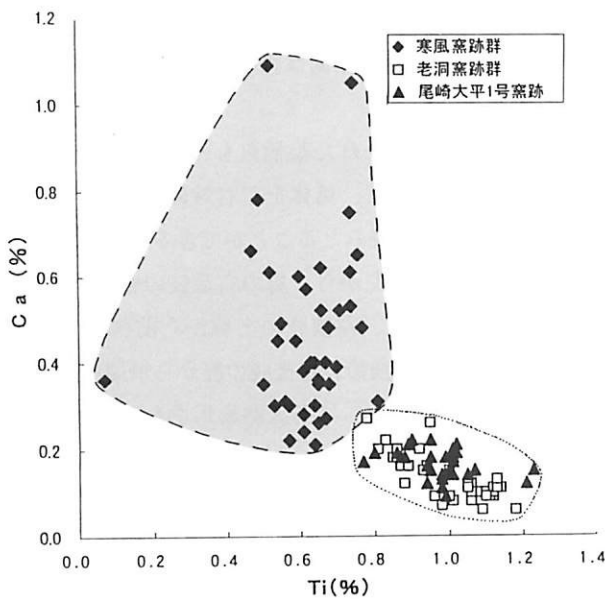


図2 生産地試料の比較

分析方法と結果 理化学的な胎土分析は蛍光X線分析法による。まず寒風窯跡群、及び美濃須衛窯跡群(老洞窯跡群・尾崎大平1号窯跡)出土資料について分析を行った(表)。両者の間でチタン(Ti)とカルシウム(Ca)の元素量に差異が見られる。この2元素を取り上げて散布図を作成すると、試料の分布がほとんど重なることがなく、識別が可能である(図2)。

平城京出土試料をこの散布図の領域に重ね合わせると(図3)、この内4・8・12・14・15の各資料が寒風窯跡群、9・11・13が美濃須衛窯跡群の各領域に含まれることがわかる。1・3は領域外であるが、寒風窯跡群の領域に近く、分布域が広がる可能性もある。2は資料本体の分析ができず、良好な結果は得られなかった。

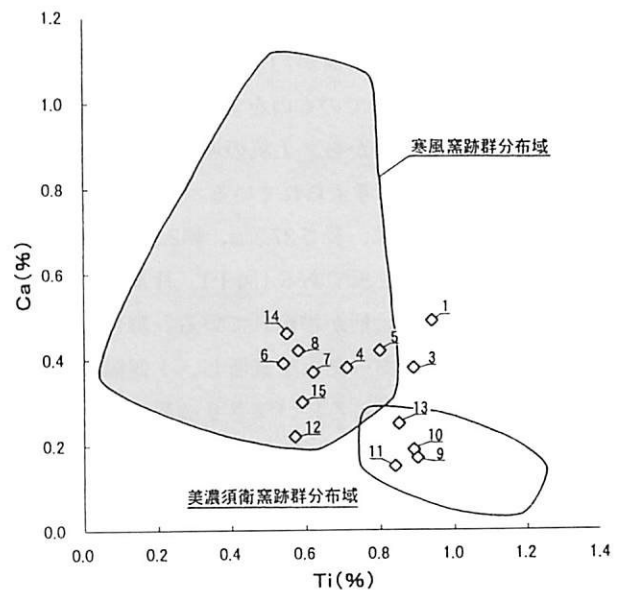


図3 平城京出土須恵器の分析結果

まとめ 平城京をはさんで西と東に位置する備前、美濃両生産地からの須恵器を、胎土分析によって分類することを試みた。考古学的な遺物の観察による産地比定ともおおむね一致しており、比定の蓋然性を高める結果となった。これらの方法は一方があれば良いというものでなく、今後互いに併用していくことで、資料の分類方法を洗練していくことが必要である。

分析を通じて、消費地にもたらされた須恵器生産地別の製品の特徴の把握や、製作技術の類似・差異の比較が可能になる。これらの成果をもとに、群別による須恵器の流通の実態や、製作技法からみた各生産地の技術移転を明らかにしていきたい。

(金田明大・川越俊一・玉田芳英)